

鰻の蒲焼きザンス

—文学と食を愛するハイパー編集記者・ぼのぼ氏の、
わくわくエッセイコラム。忘れられない子供時代の味の
数々と共に、昭和の悪ガキがよみがえる！

〈はじめに……〉

この話の舞台は、昭和三十年代の宮崎県の広瀬という町の公務員住宅。半農半漁で町民の気性は荒い。現在は宮崎市に編入。
〈悪ガキ九人衆〉

私（6歳）……三人兄弟の末子。父は中学校の教員。2歳の時に一家で広瀬の公務員住宅に越してきた。

兄サダオ（12歳）……「私」の兄。近所の悪ガキ連のガキ大将。

姉マキコ（9歳）……「私」の姉。

シゲキ（11歳）……「私」の隣家の国鉄職員家庭の三人兄弟の兄。逃げ足が早い。

マサアキ（7歳）……シゲキの弟。「私」の喧嘩ライバル。

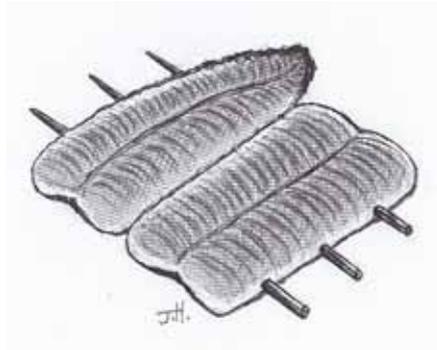
マユミ（4歳）……シゲキ、マサアキの妹。吸血ブラッシー・マユミと恐れられている。

ヒトミ（5歳）……保健所員の家庭の長女。通称「銀行屋」といわれる締まり屋さん。

ヒロシ（10歳）……気が弱く泣き虫。通称「水ツ洩のヒロシ」。祖父は厳格な退役将校。

ツヨシ（12歳）……兄サダオの親友。喧嘩っ早く「狂犬」の異名をとるが、野良犬猫を愛する優しい一面も

イラスト：服部淳子



●アオダイシヨウとツチノコ

ニイニイ、ミンミン、ジー、ニイニイ、ミンミン、ジー……。

ニイニイゼミやヒグラシが競い合うように喧しく鳴き始めていたから、初夏を迎えた頃だと思ふ。梅雨が明けて日差しがじりじりと照りつける。宮崎の夏の始まりだ。

麦藁帽にランニングシャツ姿で遊ぶ子どもたちにとって、強い日差しは大敵である。遊び疲れて土手などでうたた寝していると、肩口や顔など皮がむけるほど、日焼けしてしまい、家に帰り熱い風呂に入ると、飛び上るほどヒリヒリして要注意なのだ。

うっかり帽子を忘れて長時間強い日差しにあたつて遊んでいると、軽い熱中症にかかってしまうことも珍しくない。だから、外で遊ぶときは、親は子どもに必ず帽子と水筒を持たせる。子どもたちは遊びの途中でクスノキやコナラ、ケヤキの太木を探しては木陰でひと休みし、持参の水筒で水分を補給するのだ。

「もうーいいかい」
「まあーだよ」

私達はいつも近くの中学校の運動場で遊んでいた。この暑い盛り、何もなかった広い運動場でかくれんぼすることもないと思うのだが、周りは土手林、

よつとスケールがでかくて気に入っていたのだ。木に登り隠れることもできれば、土手の穴ぐらに潜むこともできる。例によって、マユミ、ヒトミ、マサアキ、シゲキ、私、ヒロシ、ツヨシ、兄、姉のメンバーである。

そして、さんざん遊んだ後は木陰でひと休み。土手沿いの大枝の張ったクスノキの下が皆の休憩場所であった。木登りの得意なマサアキとシゲキ、ツヨシがやにわに木に登り始めた。

大幹は幾重にも樹皮がひび割れていて、ごつごつした樹皮に手足をかけたボルダリングの要領で3mほどよじ登ると、いい具合に大枝が分かれていて、そこまでいったら後は面白いように上に横にと容易に登っていける。

だが、そこまでたどり着くのが至難の技。

マユミはいまにも登りたそうにしているが、まだ幼い彼女には無理というもの。私は木登りがそれほど得意ではない。

何でも一番でなければ気が済まない兄も木登りはそれほど得意でないから、皆に後れを取るのが嫌で登らない。ヒロシは一度木登りで枝から落ちて骨折して以来、登ろうとしない。

ヒトミと姉はどちらかという気取り屋だから、パンツが見えるのが嫌で当然のごとく登らない。だから残り

の皆は、三人が木登りするのを下からじっと見上げていた。

三人は大枝が分かれるところまでよじ登ると、大枝の先に腰かけて、青々と茂った葉っぱを揺らす涼風に当たり、さも心地よさそうである。

すると突然、

「うっへえー、大蛇がおる！」とマサアキが叫んだ。

「おつ、アオダイシヨウじゃが」とシゲキが応じる。

「どれどれ、ほんとじゃ」とツヨシが素っ頓狂な声を出す。

「危ないからへたに動くなよ、後ずさりしながらこっちに戻ってこい」と大木の下から兄が皆に指示をだした。

皆へっぴり腰で後ずさりしながら大枝と大幹の分かれ目まで戻つてくると、そこから地上までは3mほど、競いあうように飛び降りた。

「いてて、足くじいたかも…」とマサアキがいうのを遮り、

「かるく、2mはあったとよ」とツヨシが吼えた。

「そうか、でももう大丈夫じゃ」と兄が応じる。

アオダイシヨウはマムシのように毒はないから、人間に危険なわけではないが、その威容に驚かされるのだ。アオダイシヨウの腹盤の両端には鉤状のとがりがあり、これが幹や枝に引っかかることで垂直に登ることができる。

ネズミやカエル、トカゲなどを主食としているが、いまは樹上の鳥の巣を狙ってやってきたのだろう。

「うちにもアオダイショウがおるもんね、この前なんか天井から落ちてきてたまげたもん」と姉が言う。

我が家は裏手に雑木山が迫る古い農家の造りで、野鼠もどこからともなく忍び入ってくる。それを目当てにアオダイショウが侵入してくるというわけだ。姉が言うように、時々アオダイショウが高い天井の梁の上に乗ってきては、たまにドジを踏むのか、天井から落ちてくる。これにはびっくりして生きた心地がしない。私は蛇が苦手なのだが、そのルーツはどうやらここらあたりにあるようだ。

「そういえば、あたし、ツチノコを見た」と姉が続ける。

「ツチノコ？ どこでや」ツヨシが反応する。

「ありゃ幻の蛇というが。あんなもんおらん、つくり話やる」

兄が言うと、姉がむきになって、「学校の帰りに道端にいたと、すぐに転がりながら道脇の雑木林に入っていた」と言う。

ちなみに、巳年生まれの姉は、蛇の話にはこだわりがある。後にヒットした楳図かずおの「へび少女」とかが大好きであったが、しばらくは姉のツチノコ談義で大いに盛り上がった。

おそらく、蛙でも呑みこんだ蛇がすぐには動けず道端にいる所を目撃したのではと思うのだが、子どもは怖いものみたさというか、お化け話や蛇伝説の類が好きなのだ。

●白蛇は「神の遣い」

アオダイショウは、この辺りでは家の護り蛇として遇されていた。とりわけ、本種アオダイショウの白化型、いわゆる白蛇は「神様の遣い」として、家に幸運をもたらすといわれていた。白蛇などめつたに見られるものではない。

ところがいたのである。それは梅雨明けの日差しがじりじりと照りつける、蒸し暑い昼日中の事であった。

私は久しぶりに一人で遠出をした。父の姉、伯母宅を訪ねたのである。自宅からは優に一時間はかかる道のりで、しかも母にとっては何かと小うるさい小姑なわけで、子どもたちがその家を訪ねることを快く思っていないから、もちろん内緒にしての遠出であった。

伯母の家は、周りには畑が一面に広がる青々と葉を茂らせた高木の防風林の囲いの中にあつた。屋根は入母屋造りの典型的な農家の造りの借家であつた。高知で暮らしていたが、オジサ

ンが中風（脳血管障害）を患い教職を辞めたこともあり、急に暮らし向きが傾いて、兄弟を頼って宮崎に引越してきたのである。最初は伯母の長女、続いて長男が進学のため我が家に一時期同居していたが、ついには、一家ごと引越してきた。

しかし、そんな複雑な事情は私にとつてはどうでもよいことで、何と言つても明るく開放的な伯母さんの性格が好きだつた。

不遇を託しながらもめげないというか、楽天的で快活なのである。さらにいえば、ここに来るとお小遣いをたんまり貰え、おいしい羊羹も食べ放題、おまけに昼食には、おじさんに精をつけるため鰻の蒲焼がよく出される、それらが私にとつては最大の目当てであつた。おそらくおじさんが中風で倒れ、少しでも回復を願つてのことだろうが、それが目当てとは我ながらなんともあさましい！

私は涎を垂らしながら、ようやく伯母宅の囲いの入口に辿り着く。入口といつても昔風の農家だから門があるわけではない。入口の両端からケヤキの大木が空を覆うように林立していた。

ふと見上げると、頭上を覆っている大枝に2mはあるうかという白蛇が舌をちろちろさせながら構えていた。先ほどまで涎を垂らしていた私もさす

がに凍りつく。白蛇はじつとしていて動かない。元々白蛇、いや本種のアオダイシヨウは性質がおとなしいから、ママシのように跳びかかってくることはない。しかし、頭上にいると思うと、なかなかそこを潜り抜ける勇氣はない。

にらめっこすること半時は経つただろうか、囲いの中から、ぷーんと香ばしい鰻の蒲焼の匂いが漂ってきた。できることなら早く家に駆け込みたいが頭上には白蛇、このもどかしさったらない。

すると、頭上の白蛇がゆるゆると動き出し、頭上の大枝から端の大幹の方に移動し垂直に下り、根っこの方に移動してとぐろを巻く。私は鰻が食べたい一心で、そろりそろりと抜き足差し足の要領で囲いの入口を通り抜ける。後は一目散に家の方に駆け出した。「おじさん、白蛇じゃが、白蛇がおるとー」

私は急ぎ込んで縁側に駆け上がる。縁側で日向ぼっこしているおじさんは、きょとんと目を白黒させて、口をもぐもぐさせているが、思うように言葉が出てこない。すると、伯母さんが台所の方から、
「どうしたと、白蛇？ そりゃウチにもええことがちよつとはあるかいなあ」と鷹揚に答えながら顔を見せた。手に持つ大皿には、私の大好物である

鰻の蒲焼が盛ってあったのだ。

「どころであんた、昼はまだやろう？一緒に食べようや」

「う、うん」私は急ぎ込んで答えながら、へうつひひ、しめしめ、鰻、鰻と、内心ほくそえむ。

それにしても、同じひよろっばい形状なのに蛇と鰻ではどうしてこうも違うのか、雲泥の差である。ひと一倍怖い思いをした後だけにその美味ぶりが際立った。

●鰻の蒲焼

さて鰻といえは、浜松や霞ヶ浦が有名だが、近くの一ツ瀬川は鰻の産地で、東京の料亭では宮崎産はポピュラーである。

今は養殖が主流だが、当時は天然の鰻がよく採れた。清流で肥え太った鰻は変な泥臭さがなく、とてもおいしいのである。鰻釣り用の籠や一升瓶などの口に逆三角形の竹筒を差し込んで、岸辺近くの大岩の下や葦原の中に仕掛けておくと採れたものだ。

少し横道にそれるが、伯母さん流の鰻の蒲焼の作り方を紹介しよう。

鰻は何といつてもつかむのが難しい。つかんだと思うと、ニョロニョロと手から滑り出る。そこで、伯母さんのようなベテランは、まず取れたての鰻を袋に入れて冷凍庫に入れる。その

まま30分くらい入れて仮死状態にしておくと、後のさばきが楽になるのだ。

冷凍庫から取り出したらまな板上(60cmくらいの長さがあると便利)にのせ、目のちよつと下に釘ですばやく目打ちする。これで最初の難関を突破。次いで小出刃を背骨に当てながらすーっとすべらせ腹開きしていくのだ。

さらに内臓を取り出し、背骨を削ぎ取り、身を切り離す。その身を10cm位の短冊に切って並べ、肉身の真ん中両サイドに串を打つ。皮は堅く串が通りにくいので避ける。最後に軽く塩を振り、下ごしらえはこまで。上手に捌くようになるまでにはかなり練習を積む必要があるというが、少々出来が悪くとも焼けばそこそこ旨くなるのが蒲焼の良いところだ。

次に炭火による白焼き。皮の方から焼いていく。焦げ付かないように小まめに裏返して焼くこと30分、白焼きの出来上がりだ。よけいな油が落ちて、ほんのりきつね色になるかならないかくらい、身がふんわりした状態が目安である。

一方でタレ作り。伯母さんの味付けは、料理酒とみりんを強火で1分ぐらい煮切らせて、そのまま強火で醤油と砂糖を入れ、再沸騰したら焦がさないように弱、中火にして10分。これでタレつくりは終了だ。

いよいよ蒲焼の開始。伯母さんは、白焼きをタレにつけ、再び皮の方から炭火にかけていく。小まめに裏返し焦げ付かないようにし、仕上げにタレをつけて出来上がりだ。身と皮のくつき具合がふわふわ状態になり、離れてしまう直前で焼を止めるのがポイントなのだ。

残った骨は油で素揚げして、骨せんべいにして食べるのもいける。内臓肝を（胃袋はいったん中を開き、鰻が呑みこんだエサを取り除いておく）タレにつけて肝焼きにするのも最高だ。共に山椒の粉をつけて食すると一層味が引き立つ。大人なら、酒の肴にももってこいである。

●お灸をてんこもり

話を元に戻そう。目当ての鰻の蒲焼をたらふく食べて、デザートの羊羹でひと休みしていると、傍らでは、おじさんが鰻の蒲焼を鰻丼にして、自由の利かない手にスプーンを持ち、ゆっくりゆっくり食べている。私はその顔をじいっと見つめる。

「おじさん誰かに似ているんだよなあ……、そうだつ、トニー谷だー」

当時、「あなたのお名前なんてなの？」と算盤はじいて歌っていた、キザが売りの人気コメディアン（故人）である。実写版『おそまつくん』のイ

ヤミの役も演じていた。

片や伯母さんは、どちらかということ、おちよぼ口の岸田今日子（女優・故人）といったところか。二人は大正初めの生まれでモガモボ世代。若かりし頃はお似合いのカップルで、社交ダンスでずいぶん楽しかったらしい。

今でも仲が良いといえればよいのだが、おじさんが身体不自由になってからは、ちよつとした諍いも絶えないよ。うだ。大体は昔話におひれがついてというパターンで、本日はあいにくその着火役を私が引き受けることになってしまった。

伯母の家では昼食の後、おじさんに灸をするのが日課。この日も縁側におじさんが寝そべり、伯母さんが灸をすることに。

中風七穴といわれる中風予防のツボは、上半身が百会穴（頭頂部）、風池穴（後頸部の髪の生え際）、曲髻穴（耳の後ろのぼんのくぼといわれる箇所）、肩井穴（両肩のくぼみ中央）、手足では曲池（肘を深く屈し、肘下横紋の外端）、風市（大腿部外側、直立して腕を下垂し、手掌を大腿部につけたとき、中指の先端が当たる所）、足三里（膝の外側直下の小さなくぼみから指四本分下）などといわれる（諸説あり）。そのツボに灸をしていくのだ。灸には、ヨモギから製造するもぐさを使用する。やり過ぎて水ぶくれしたり跡が

残ったりしないように温灸器具を使うやり方もあるが、おじさんの場合は直に点灸する方が効果があるらしく、いつもそうしていた。現在では、便利な細い棒状の点灸用もぐさを少しちぎってツボに立て、線香でもぐさの先端に点火し、少し温まった所ですぐに取り去る、これを繰り返すやり方が一般的だが、当時、伯母の家では、あらかじめ濡れタオルを用意しておき、もぐさを指先で尖塔型に小さく丸めてツボにのせ、その先端に線香で点火してしばらく置くというやり方だった。もぐさの分量も多いし、しばらく置いたままにするので熱も強烈だが、神経が麻痺しているおじさんにはそれくらいがちょうどよいらしい。

「おじさんとおばさんはダンスが上手だったって聞いたけど」

私が灸をやっている伯母さんに尋ねた。と、おばさんはさも嬉しそうに、「そうやねえ、二人で町のダンス大会で優勝したこともあったからねえ」と答える。

二人は戦前、旧植民地の台湾で結婚している。というのも、わたしの父方の祖父母は宮崎で共に教員をしていたが、結婚するときに台湾に渡った。なんでも曾祖父が大阪で先物取引を扱う商人の保証人になって、大きな損失を被った挙句亡くなり、そうしたドタバタのなかで、当時付き合っていた祖

母と、周りの反対を押し切り駆け落ち同然で台湾に渡ったらしい。

伯母さんは新天地の台湾で生まれたが、わたしの父も台湾生まれの台湾育ちである。戦後引揚で初めて日本の土を踏んだという。伯母さんの方は、子どもの時に一度は故郷の宮崎を訪れているらしいが、伯母さんにとっては青春時代を過ごした台湾の方がことのほか思い入れがあり、懐かしいようだ。おじさんは高知で生まれ育ったが、苦学して教員になろうと台湾に渡ったのだという。そこで教員をしていた祖父母の目に留まり、伯母と結婚したというわけである。

「おじさんも、今はこんなにしているけど、ハンサムやったんよ。私もこう見えて『小町』といわれていたからねえ、そりゃあ、みんなが羨むカッパルだったんよ」

臆面もなく自らを自慢するおばさん、やはり南方育ちというか、日本人特有の「謙虚・奥ゆかしさ」の美意識は持ち合わせていない。遠慮なく思ったことをずけずけと言うタイプである。

「でも、あなたのお父ちゃんとキヨ叔母さん（父の妹）も上手やったんよ、二人ともペアでルンバやチャチャチャを躍らせたなら、右に出る者おらんかったわ。それにあなたのお父ちゃんはクラリネットやピアノ、ハーモニカも得

意だったから、人気もんでねえ」

伯母さんは鮮明に当時の映像が蘇るようで目を細めた。それから、次々と当時のことを思い出しては、おじさんに話しかける。寝そべって灸をしてみらっているおじさんは、その度に「ふむむ」と気持ちよさそうに頷いている。

ところが、話がおじさんからプレゼントしてもらったルビの指輪のことに及んでくると、だんだん雲行きが怪しくなってきた。どうやら思い出のルビの指輪を、引き揚げてきた輸送船の中で紛失してしまったらしい。

終戦時に台湾に在留していた日本人は、軍人16万人強を含めて約49万人であった。軍人の復員から始められ、1946年2月に完了した。一般人については、日本国内における食糧難などの混乱を恐れ、台湾人からの報復もなく約20万人は台湾にとどまることを希望したが、国民党政権が、インフレ等の社会問題の発生もあり、大量の日本人が台湾に残留することを望まなかったため、引揚者一人あたり現金千円、途中の食糧、リュックサック二つ分の必需品の持ち出しのみ許され、一般人の引揚は1946年4月20日に完了した。そんなわけで、台湾からの引揚者は軍人、一般人合わせて45万人弱であったという。

私の祖父は、終戦の混乱時、植民

地で役人のようなことをしていて、多忙な敗戦処理業務の最中に盲腸炎をこじらせて亡くなった。殉職である。残された家族は、祖母と叔母二人の女性ばかり。私の父は、南方でマラリア熱に冒され肋膜炎を併発し一度除隊したが、「天皇陛下に申し訳ない」と、叙勲を受けていた祖父の言いだけで再度兵役徴収を受けることとなり、その軍役が台湾にあった連合軍俘虜収容所であった。そのため、現地で軍事裁判を受けることになって、長いこと留め置かれた。それなりに責任ある地位にあったから、俘虜虐待のB級戦犯容疑で拘留されたのである。

ただ、父は元々ジャズ好きで、当時は敵国音楽として封印されていたジャズを、密かに俘虜囚と一緒にセッションしていたらしい。そのことが取調中に元俘虜兵の証言で判明し、容疑対象から外されたのだという。文字通り「芸は身をたすく」であった。

一方、おじさんも軍役についていたが病気がちで、最前線からは外されていた。おかげでひと足早く故郷の高知に復員することとなり、伯母さんもそれを追いかけるように高知に引き揚げたのだった。

伯母は、引き揚げの混乱ぶりや、初めて降り立った高知での引揚時の苦勞の数々を走馬灯のように思い出すように、だんだん不機嫌になっていく。

午後3時くらいには閉じてしまうから、残念ながら観ることはできない。

皆は池の土手に座り、しばらくはホタルが放つ光の筋に見とれていた。

すると姉が口を開いた。

「私、見たとよ」

「なんをや？」とシゲキが問いかける。

「河童」姉が答える。

「えっ、本当にか？」とシゲキが素っ頓狂な声を出す。

「オレも見たと、河童」そこにヒロシも加わった。

「なんを言うちよつとか、お前ら」兄がその話に割って入る。

「そんなのおらんわ」ツヨシも兄に加勢する。

「うんにゃ、ほんとに見たとよ」と姉が言い張る。

いったん口に出したらテコでも引かないのが姉である。

「まあ、待てや。ちょうど蓮根掘りの季節じゃが。ため池にもぐって蓮根を掘るおじさんがいるから、それと見間違えたと違うんか？」と、シゲキが冷静に分析するが、

「いや、あれは確かに河童じゃった」姉は頑として引かない。

「わかった、わかった、お前の言う通りじゃ。そりゃここなら河童もいるかもしれないが」

兄がいい加減に河童話を打ち切らせようとひきとる。

一瞬の沈黙。

そこに、池を囲む雑木林の枝と葉が風にあおられて一斉にザワザワッと音を立てた。そして池の水面が波打ち、ピチャーンという音が、あたりにこだまするように響いたのである。

「なんや、今の音」
「なんじゃろね」
とそれまで黙っていたマユミとヒロミが口を出した。
するとまた、ピチャーン、ピチャーン……、
皆のいる所に向かって、音は段々近づいてくる。
目を凝らすと、一瞬大きなものがキラリと光り、水面を跳んだ。さらによくよく目を凝らすと、水面の至る所で、大きな塊がはねている。蓮が揺れ、ちらりと鱗のようなものが光るのが見えた。河童の体は鱗に覆われているというから、これは本物か……!?!
「うわあああ出たあ。河童じゃあ〜っ〜」
とまずヒロシが叫んだ。
「おお河童じゃがあ」とマサアキと私が続く。
「やっぱりいたやろお、河童」と姉が吠えた。
「とにかく、皆ひとまず退散や、退散〜」
と兄が号令をかけ、皆一目散に家の方に駆け出したのだった。

今振り返れば、このときの河童の

正体は、池に生息する鯉や大鯰であったのかもしれない。この灌漑用水池は

数年に一度、秋の収穫後に水を引かせ、

鯉や鮒などの魚やタニシを採る漁獲祭

が行われる。中には優に1mはあるう

かと思われる巨大魚もけっこう採れる

らしい。その巨大魚が水面を跳ねて、

蓮が動いたというわけだ。

しかし、この池には昔から河童伝

説があった。

子どもが池で泳いでいると、池の

底から河童が手を伸ばし、水底に子ども

もを引きずりこむというものである。

この池では実際に、数年に一度は

子どもの溺死事故があったので、子ども

もが池に近づかないための大人の知恵

だったのかもしれない。

だが、ひよつとしてひよつとした

ら、やはり本当に河童がいたのでは

……。

と今なお思わせるほど、その池は

昼間でもひんやりと静かで、不気味な

雰囲気を感じさせていたのである。

●ホタル光のページェント

そして、初夏の仕上げのイベント

は、近くを流れる一ツ瀬川のホタル見

物だ。

ホタルの光はオスとメスが出会う

ための合図で、メスの弱い光に対して

オスが強い光を放つ求愛行為だという。その求愛行為が、一級河川のとてつもなく広い川面一面に繰り広げられるのだ。

一斉にフワフワつと点滅して、下流から上流へ、そして上流から下流へと移動する。その数たるや何十万匹とといった規模で壮観である。とくにイベントとしてホタル見物があるわけではないが、自然発生的に近隣から大勢の人が集まってくる。

川の土手には私の大好きな鰻の蒲焼の屋台まで出る。前にも述べたように一ツ瀬川は鰻の名産地なのである。それを食べながらのホタル見物。何と幸せなことか！

ホタル見物が終わるといよいよ宮崎の夏本番。花火大会と海水浴が待っている。子どもたちにとつてはさらにワクワクする季節の始まりであるが、その話はまたいつか……。了

イラスト・服部淳子

